

ディアコニア



説教

あなたは知らねばならない
あなたの神、主が神であり
信頼すべき神であることを

牧師 佐藤 千郎

ある日のこと、ユダヤ人で律法の専門家が「父祖たちの時代から大切に受け継いできた神の言葉の中で、一番大切な言葉は何でしょうか」と、主イエスに尋ねました。

主イエスは「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」(マタイ福音書22章37節)と言われました。

この言葉は、主イエスだけが言われたのではなく、旧約聖書・申命記6章にある言葉で、ユダヤ人が子供の頃から、日常の暮らしの中で、いつも心に留め、口ずさんでいる言葉でした。申命記にこう書かれているからです。

「聞け、イスラエルよ。」

我らの神、主は唯一の主である。

あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。

今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、子供たちに繰り返し教え、家に座っているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。更に、これをしるしとして自分の手に結び、覚えとして額に付け、あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい。」(申命記6章4～9節)

読み手に具体的な指示をするこれらの言葉から想像される風景が、当時のユダヤ人の日常でした。そして、言葉の冒頭にある「聞け」という意味のヘブル語に因んで、この一文を「シエマー」と呼んでいたユダヤ人にとっては、「シエマー」を共有し、この掟を忠実に生きることが自分たちが神に選ばれた「選民」であることのしるしでした。

更に、「シエマー」と並んで、ユダヤ人が大事にしていた掟が「十戒」(出エジプト記20章)ですが、その第一の戒めには

「あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない」とあります。

「シエマー(聞け、イスラエルよ)」に続く「我らの神、主は唯一の神である」という唯一神信仰の告白は、多神教が普通であった古代オリエントにおいては、特異なことでした。

そのことを思うと、「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして神を愛する」ことは、自分たちは唯一の神に選ばれた特別な民であるとの、強い信仰に生きたユダヤ人にとっては、多くの民の中から自分たちを選んでくださった神への驚きと、献身の思いを込めた応答だったので。

何故、ユダヤ人はこれほどまでに「あなたの神、主を愛する」ことにこだわるのでしょうか。それは、神を愛することが神に選ばれた自分の本当の姿を知ることにつながったからでしょう。さらに、自分を知ることが、隣人との(愛の)関係を、根本から変えていったからに違いありません。

選びについて、申命記には、次のよう

に書かれています。

「あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面にいる全ての民の中からあなたを選び、ご自分の宝の民とされた。主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちはどの民よりも貧弱であった。ただ、あなたに対する主の愛のゆえに、あなたたちの先祖に誓われた誓いを守られたゆえに、主は力ある御手をもつてあなたたちを導き出し、エジプトの王、ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである。

あなたは知らねばならない。あなたの神、主が神であり、信頼すべき神であることを。」(申命記7章6～9節)

ユダヤ人が選ばれた理由は唯一つ、神が、彼らの貧弱に心引かれたからです。

古代社会においては、その民族が強いか優秀であるかどうかは、民の数によっていましたから、最も貧弱であったとは最も小さい存在、即ち、存在する値打ち

さえないものを意味しています。

自らを、神に選ばれた特別な民と信じ、その信仰に一筋に生きたイスラエルが出会った神、それは、存在する値打ちさえないものとされた民を、見放すことも見捨てることも出来ない神であったことを、申命記は明らかにしています。

主イエスは、「私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」(マタイ福音書25章40節)とされました。聖書の神は、最も小さい者の一人に心引かれ、この者を選び愛する神に他なりません。

人は、この神に出会い、この神を知ることによって、いのちに秘められた真実(神のご意志)に初めて向き合い、一つひとつのいのちの尊厳に気づかされます。

さらに、神を愛する愛は、人を、隣人を愛する愛へと向かわせ、最も小さい者のひとりを見放すことも見捨てることのない者へと変えていくのです。

神を愛しなさいと言われる主イエスは、**「第二も、これと同じように重要である。」**

隣人を自分のように愛しなさい。」(マタイ福音書22章39・40節)と言葉を続けられました。

年初から始まった新型コロナウイルスの世界的流行は、今も各地で猛威を振るい、未だ収束の兆しが見えて来ない中、社会に広がる不安と恐れが、今まで隠されていた分断と排除をあらわにしてきた現実を、見過ごすことは出来ません。

公共の前面に、異論の余地のない理屈が正義を曇らせ、今はやむを得ないという心理状態へ、弱い立場にある人々を追い詰めていく空気を生んでいくことに、危惧を覚えるからです。

他方、医療従事者はじめ、いのちの危機と向き合う人々の、体を張った献身的な振る舞いが、人々に感動と応援をもたらしています。

私には、これら献身的な働きに、貧弱な民に心引かれ、その民を愛された神の思いが重なります。そして、神が約束された希望の基もとが見えてきます。

(ベテスタ奉仕女母の家・理事)

「支援」から「共生」へ

天羽さんと横田さんの対話から

林 葉子

（同志社大学人文科学研究所・助教）

私は大学で歴史研究をしています、四十代になった頃から、自分に残された人生の時間を、自分が本当に大切だと思うことについての研究に使いたいと考えようになりました。

そして「人が人を助ける」実践こそ、最も困難で、その積み重ねの軌跡こそ、最も尊い歴史なのではないかと思に至りました。「人を助けること」に人生をかけた人々は、何を考え、どのようにしてそれを続けることを可能にできたのかを知りたいという気持ちですが、いずみ寮かいた婦人の村での調査を始めた動機です。支援活動の中では、きつと人間不信に陥りそうな事件だつて起ころうでしょうに、途中で心が折れることなく活動を続けられたのは何故なのかを、知って学びたいと思いました。

もう一つ、私が知れたかったことは

「人を助ける人」は、かつて「助けられた人」だったのではないかということです。支援者と被支援者は一般に、両極にある異なる存在のように捉えられますが、本当は、両者は同じなのではないか。支援者と被支援者を別々の存在として分けて考えてしまう思考こそ、混乱の原因ではないかと思えるのです。

そのような問いを持ちながら、誰よりもまず私自身が聴きたい講演会の企画として、昨年（19年）10月8日に、同志社大学人文科学研究所の主催で、天羽道子さんと横田千代子さんを中心とする公開講演会「キリスト教信仰に基づく女性支援の歴史―かいた婦人の村の半世紀」を開催しました。

平日の昼間にもかかわらず盛況で、約90名の方が聴きに来てくださいました。

その講演はブックレットとしてまとめ、インターネットで公開しています。左のアドレスからアクセスしてご覧ください。
<https://jinbun.doshisha.ac.jp/attach/page/JINBUN-PAGE-JA-4/133795>
<file/64.pdf>

その講演会で、天羽さんと横田さんからは、非常に深みのある、タイムリーなお話をいただきました。その講演内容については前述のブックレットに譲り、ここでは、講演会の後で一緒にお食事をした時の会話から得た私の学びを、こぼれ話として記します。

その会話の中で、最も私の印象に残ったのは、婦人保護施設に入所した人々、どのように表現するかということですが、もちろん、一人一人は、〇〇さんという名前で呼ばれるわけですが、全体として表現する場合にはどのような呼称が適切かということが話題になりました。私は講演会の司会を務める中で、あまり深い考えもなく「入所者」という言葉を用いていました。

しかし横田さんは、「私は、入所者という言葉は使わないのよ。いつも、利用者って表現しているの」とおっしゃいました。婦人保護施設が1958年に設立された当初は、まるで刑務所のような雰囲気だったり、「収容」という言葉が用い

られていたために、横田さんは、そのよ
うな旧来の管理主義的な施設の在り方を
変えていくという課題に長年にわたって
取り組んでこられました。その一環とし
て、入所する女性たちを主役とし、彼女
たちが主体的に施設を「利用する」のだ
という考え方に基づき「利用者」である
とおっしゃったのです。

それに対し、天羽さんは、「私は、利用
者とは言わず、村人と言っています」と
おっしゃいました。かにた婦人の村は、
他の婦人保護施設とは異なる長期入所の
施設であり、「ひとつの村」なので、「利
用する」のではなく、そこで「暮らす」
そうやって暮らしている人は「村人」な
のだとおっしゃいました。そして、天羽
さんご自身のことも、同じ「村人」と表
現されました。

私はこのお二人の対話を拝聴していて、
「利用者」という表現と「村人」という表
現とが、ともに、支援する者と支援され
る者との間に生じがちな権力関係の問題
について繊細な考察を行った上で、入所
した女性たちの主体性をいかに大切にし

ようとしてきたのかを表している言葉だ
と感じました。同時に、これから先の女
性支援の在り方は、「利用者」と「村人」の
どちらの方向へ向かっていくべきなのか
と考えさせられました。

天羽さんは、ベテスタ奉仕女母の家を
「共産共同体」とも表現なさいましたが、
そのような「共同体」が日本社会の中で
保たれてきたということ自体、奇跡のよ
うな話です。私は、シユベスターになる
ということが、結婚をせず、家族を持た
ず、人生のすべてを社会的弱者への奉仕
にかけることであると最初に知った時、
たいへん驚きました。

女性たちが若い時に、そのような重大
な決意をもって支援活動に飛び込み、支
援する人と支援される人とが、同じ「村
人」として共に生きていく場を創り上げ
ていったことは、稀有な尊い歴史です。

しかし、そのような「共生」の「村」を、
これから先も日本社会の中に創って広げ
ていけるだろうか考える時、正直なと
ころ、非常に心許ない感じがします。
しかし、そもそも支援活動とは、それ

ほどに厳しい道であるということをし、社
会の皆知っている必要があるのかもしれ
ません。

最近、韓国で、日本軍「慰安婦」問題
をめぐる被害当事者と支援者との関係性
について頻繁に報じられ、それが日本に
も伝えられています。そうした報道に
接するにつけ、ベテスタ奉仕女母の家で
は、シユベスターたちが家族を持たず、
入所した人々と同じ場所に住み、同じよ
うに働き、同じものを食べ、同じ「村人」
として生きてきたということの意義につ
いて、理解が少し深まったように思いま
した。なぜ、シユベスターたちがそれほ
どの覚悟を決めて支援活動に入っていっ
たのか？ やはりそこには、支援を行う
ことの困難さへの自覚が最初にあったの
ではないかと感じられるのです。

「支援」からさらに一歩踏み込んで「共
生」の場を創るといふ、困難で尊い事業
に取り組んだかにた婦人の村の歴史は、
容易に真似できるものではないにせよ、
これから先も、私たちの行先を照らす灯
台の燈のようだと思います。

ディアコニアの原点⑧

ひとり デiakonia17号より

☆かよわい女性が生涯をささげて不幸な同胞への奉仕に生きぬこうとするとき、彼女らが各個に撃破されることのないために、物質的にも精神的にも緊密な共同体を形成しなければならぬことは言うまでもない。そのために女性としての極限まで身のまわりを節約し、私有物のむだをはぶき、長上の命に服し、たがいの困難をたすけあうさまは、母の家奉仕事業のそとでは見ることのできない理想的なものである。

☆しかし、その美しい共同体のゆえに、姉妹たちが人間の関係に気をとられず、なぜ自分の奉仕は長上にとめられないのかと考え、自分の仕事を他にまかして苦しいと誤信し、なにか困難ことがおこると誰かが飛んできて助けてくれそうなものだと期待するとしたら、その姉妹はキリストの御声によばれて献身したものでなく、そのような共同体は烏合の衆

であつて、真の母の家とはよびがたい。

☆ほんとうの共同体とは、人間と人間とが一切もたれかかろうとせず、各自がキリストにのみ堅く直結することによつて黙々と与えつづけている、そこにある歓喜の呼応から生れる。どんな奉仕でも、それが奉仕と名の付くほどのものは、死ぬほど苦しいものであることを、心に銘すべきである。同輩にほめそやされ、長上からもヌクヌクと理解され、そして不幸な友にも仕えようと願う姉妹は、キリストの婢はしためではない。

☆たつたひとりでも、歩まねばならぬ道であつたはずである。しかるに、指導者をあたえられ、同輩をあたえられ、帰つて憩う家があり、身につける清潔な制服があり、飢えをしのぐ糧がそなえられ、おおくの友から祈られてゐるがゆえに、かえつて初めの孤独な決断をわすれたとするならば、地球上のひとりのこらざるを向こうにまわして十字架に死にたもうたキリストは、その人をなんとこらんなるであらう？ (57年2月 深津文雄)

己をあたえること

ディアコニア24号より

☆イエスは、〈我に來たれ！〉と言つた。これは、なかなか言えないことばである。うっかり、そんなことを言おうものなら、ウズウムズウがおしかけてきて、こまつてしまふ。それでも、帰るところのあるひとは、忍耐していれば、いつかは帰つてゆくであらう。しかし、行くアテのないひとは、そのまま、そこに居ついてしまふ。それが、我々にはこわいのである。

☆イエスは、ところが、〈重荷をおうもの、我に來たれ！〉と言ふ。ほんとうに困つてゐるなら、うちへ來なさい——と言われる。チョイと利用して、くいにげをしてまわるような奴ではなく、はだかになつて飛びこんでくる気なら、いっしょう引きうけてあげよう——とおっしゃる。しかし、そういう身寄りのない弱者をあつめてサクシユしようというのでもない。

☆イエスは、〈重荷をおうもの我に
来たれ！我なんじらを休ません〉と
言う。いかえれば、いっしょに寝
ころんで暮らそうと言われるので
ある。彼は、ひま人だった。いつま
でに、どれだけ、しなければならぬ
という仕事もなく、食いへらされて
は困る財産もたなかつた。そつ
くり、自分を投げだしてかかつてい
たのである。

☆この、自分を投げだしているとい
うことが、まず、無ければならない。
小さな自己の計画をおいもとめつ
つ、金のために時間を限つて、不幸
な人々の友達になる——というよ
うなことが、どうしても、うまくゆ
かない理由は、そこにある。この一
つしかない生涯を、一秒も残らず捧
げきつてかかるとき、はじめて、イ
エスの愛の奇蹟がおこるのであろう。

(58年4月 深津 文雄)

Diakonissenspruch.

**Was will ich ?
Dienen will ich.**

**Wem will ich dienen ?
Dem Herrn in seinen Elenden
und Armen.**

**Und was ist mein Lohn ?
Ich diene weder um Lohn noch Dank,
sondern aus Dank und Liebe :
mein Lohn ist, daß ich darf.**

**Und wenn ich dabei umkomme ?
Komme ich um, so komme ich um,
sprach Esther, die doch ihn nicht kannte,
dem zuliebe ich umkäme
und der mich nicht umkommen läßt.**

**Und wenn ich dabei alt werde ?
So wird mein Herz grünen
wie ein Palmbaum
und der Herr wird mich sättigen
mit Gnade und Erbarmen.
Ich gehe mit Frieden und Sorge nichts.**
W. Löbe.

奉仕女の言葉

我 なにをか なさん？

我は つかえん。

誰にか つかえん？

とほしくなやめるものに
ゆきて、主につかえん。

そのむくいはい 何ぞ？

むくいも感謝もいらじ。
感謝と愛とよりなすなり。
なすべきことをなす、
これわがむくいなり。

かくて ほろびんか？

我ほろびなば我はほろびん
と、主をしらぬエステルは
いいぬ。されど我はよろこ
びて主のためほろび、主は
我をほろびに すておきたま
わざるなり。

かくて 老いんか？

わが心はみどりなす棕櫚の
ごとく、主はめぐみとあわ
れみとをそそぎたまわん。
平安のうちに 我はゆく。
我うれうるとこあらじ。

(ザイルヘルム・レーヘ)

「初めての着衣式の間合うように、Schw. ルツイエが書いて送って下さったもの」

施設だより

かいた作業所エマオから

エマオはこの6月、開所7年目を無事迎えることが出来ました。新型コロナウイルス騒ぎ真最中の4月に、就労継続支援B型事業所の更新申請書を千葉県に提出。無事受理されて、6年間の事業継続の許可が下りました。

台風15号の被害と顛末

9月8日深夜から9日未明にかけての台風は、私がかいた婦人の村に奉職して以来45年の中で、初めて経験した「命の危険」を感じた台風でした。

我が家は、館山市でも比較的历史のある住宅地（館山市北条地区）にあります。瓦棒引きのトタン板屋根やコロニアル葺きの屋根、日本瓦の屋根など、風による屋根への被害が50パーセント以上の確率で発生したようです。我が家も、近所の屋根から飛ばされてきたコロニアル

のかけらによる被害で、屋根裏部屋の窓ガラスが割れて、2部屋が水浸しになりました。

夜が明けるのを待って、エマオへ来てみると、作業場の屋根材が途中の道路に散乱していました。建物の中は水浸し。冬から春にかけてのバザー用の商品を段

ボールに詰めて積んであったのですが、それがぐっしょり濡

れて暴風に吹かれ、段ボールが剥がれて飛び散り、商品は雨漏り

した床に崩れて散乱しています。衣類が水をたっぷり吸って一人では動かしよう

がありません。

急いで自宅へ帰って朝食をとり、ホームセンターへ行くと、工

事業者のような方たちが10枚セットの大きなブルーシートを何束も台車で運んでいました。残り少ない商品の中から、出

来るだけ大きなブルーシート（10メートル四方のもの）を2枚購入して、職員の出勤を待ちました。

出勤してきた職員と対策の打ち合わせ。

女子職員と利用者でバザー用に保管して

あった商品の片付け（被害の拡大阻止）

濡れた商品と、無事な商品の選別。濡れた

商品の処分などを行いました。

外の片付けでは、飛んでしまった屋根

材（屋根の約3分の1が剥

離）の収集と集積。ご近所

へのお詫び。壊れたシャッ

ターの修理や陳列して

あったバザー用商品の片

付け、屋外の掃除など。こ

の時点では、復旧にどの位

の時間がかかるのかわか

りませんでした。エマオ

の電気の復旧には1週間、

電話の復旧には4週間も

かかりました。



予定していたその週末9月13日14日のバザーを2週間延期することを決め、房

日新聞へ記事掲載の依頼。延期を決めた後、ボランティアさん達への連絡方法がないこと、電気が来ないと作業場のシャッターも開けられない事など、問題がいろいろ出てきました。

その中で、助けられたのは、かにた婦人の村の食堂が閉鎖されず、昼食を提供し続けてくれたことです。

作業場の屋根の修理は、旧知の建設会社の監督さんに被害査定を依頼し、早速保険会社に保険金の請求。年末に保険金が支払われることが判ったので、建設会社の了解を得て、エマオの利用者さんの実家（板金業）に依頼して、屋根全体の張替え工事が実施出来ました。

9月のバザーでは、商品をたくさん廃棄せざるを得なかったため売上げは減少、それ以降のバザーでも売上げは振るわず、予定していた収入額には遠く及びません

でした。

しかし夏の間には民宿から戴いておいた布団のセットが、台風で被害を受けた安房地域の方たちに、無料配布出来たことは、とても良かったと思います。

エマオ利用者の一般就労

一昨年からは、一般就労を目指して就職活動をしてきた若い女性の利用者が、今年の4月から、市内の企業に就労することが出来ました。

一昨年秋の職場実習では、遅刻や欠勤、職場でいじめのようなことがあったり等つらいこともあったのですが、時間をかけて「働いてお金をもらうこと」を理解していき、昨年の初夏に職場体験から短期のアルバイトへとつながりました。しかし、そこでは、パート職へは結びつきませんでした。

その後、毎月1回のハローワーク訪問を続けましたが、通勤手段の問題や、本人の希望と合わなかったりして、なかなか決まりませんでした。

今年の初めに、ハローワークからの紹介で職場体験を実施。店長さんの気配りもあり、良い状態で職場体験を終えることが出来、就職試験を受けられることになったのです。3月初旬に「合格！」。「4月1日から職場へ通っています」とグループホームの世話人さんから報告がありました。

この様なエマオの支援状況が評価され、特別支援学校からも、「将来、一般就労を目指す」方たちの就労先として、エマオを考慮して頂けるようになってきました。少し責任を感じますが、楽しみも大きくなります。

バザーを通して「地域貢献」と「障害のある方たちの成長の場」を提供してゆきたいと思います。今後も、エマオへの応援よろしく願います。

（エマオ施設長 佐々木 清）



かいた婦人の村

台風15号被害その後

台風15号から数か月過ぎても、南房総の建物にはまだまだブルーシートが掛かり、年内には復旧の目途が立たないまま新年を迎え、ようやく復旧工事がちらほら見えるようになってきました。

かいた婦人の村も、地元の建設会社に工事をお願いしていますが、そこも数百件の工事を抱え、なかなか順番が回ってきません。

理事長から、法人でお付き合いのある



管理棟が組まれた足場

ときわ建設に依頼したらとの提案を受け、被害が大きく生活に支障

があつて急を要する食堂や寮などの各建物と、コンパネで雨をしのいでいたあちこちのガラス修繕とを、ときわ建設に依頼。まずガラスの入れ替えが終わって、

利用者さんの不安が少し和らぎ、あとは本格的な建物復旧作業に入ろうとした時、今度は新型コロナウイルス禍です。ときわ建設は県をまたいでの移動が伴うので、不安を抱えながらも、マスク装着等の対応をとって頂きながら、工事を開始しました。



鉄の柱を1本加える

食堂入口は波板修繕に加え、台風で押された壁のゆがみを鉄骨1本追加して直し、食堂棟の屋根3カ所の修繕工事。

次は軒と屋根がやられてしまった大きなデザイン寮の修繕です。足場を組み、ソーラー温水器の下までめくれ上がった

屋根材の補修の為、

ソーラー

は取り外し、屋根

の板金工



きれいになったデザイン寮



農園牛舎

事。軒が崩れ落ちた木材が丸見えになった箇所もきれいになりました。

農園牛舎の軒も、梁を支える柱がず

れて落ちてしまい、大変な工事です。一番太い梁は残したいので、まわりから修繕していきました。また南側のサッシも入れ替え、綺麗になりました。

ときわ建設の工事が終了し、次は地元の建設会社の工事が始められるということになり5月末管理棟と各寮に足場が組みました。



これで雨は漏りません

しかし全国的な資材不足が深刻なため、7月になっても工事は始まりません。修繕が完成してブルーシートが外れる日を楽しみに待っています。

(かいた婦人の村営繕係

小川 照明)

ゆくとまご

ヒトコト
ヒトコト

新型コロナウイルス対応で、今までと

違った生活のあり様を、緊張と共に経験している中で、ホッとした喜びが。

昨年9月の台風被害の修繕工事がやっと始められ、最もひどかったデイジー寮屋根のブルーシートがはずれたこと。大雨のたびに雨漏りがひどく、よく耐えていた8か月でしたから。

工事はいまだ継続中ですが、被災後、なんと多くの方々のご協力・善意を頂いたことでしょう。ボランティアとして定期的に、また自発的に、倒木の片付けを受け持ってくださいとのことなど、感謝にたえません。

天羽 道子

*

かわりなく老人施設で暮らしてあります。まだ外出はできませんがコロナの事もおさまれば、教会にも行けるのではないかと思います。外は夏が来て暑さもきびしくなったというのに、老人施設は昼

も夜も安全に守られていて有難い事です。

祈りの友の皆様はどの様にお暮らしていらつ

しゃいますか。どうぞお元気でお過ごしになられます様にお祈りしております。

眞山 知恵子

*

体調不良なく過ごしています。室内でも、お花見気分が味わえるように、みんなまで折り紙の桜の花を作って飾りました。「家でも花見が出来る」と、笑顔で喜んでいます。

桜庭 歌子

*

元気で過ごしています。すすんでモップ掛けや食卓の片付けをしたり、みんなと調理なども楽しんでいます。

新型コロナウイルス感染症対策で、散歩にも行かれませんが、2階の居室から海を眺めたり、山を眺めたりするのがうれいです。

小川 都代

今は直接会うことが出来ませんので、シユヴェスター歌子とシユヴェスター都代の様子を相浜ガーデンのスタッフの方に、聞き

ました。二人とも6月生まれなのですが、お祝いの会食には外出できなくて残念！

*

6月末になり、自然は新緑とアジサイ、クチナシ他、夏の湿潤をおおう美しさです。私は大腿骨折で2月18日入院し、手術。リハビリで84日を経過し、5月12日に退院して、母の家で訪問介護を受けながら生活しております。

今回のいろいろな経験が残された日々大切に宝として生かされるよう、また多くの人の助けを感謝しております。

細井 陽子

*

姿なきコロナウイルス春の塵
人の世に狂ひしコロナ春の塵
触れ合ひに反するコロナ春の塵
命まで失うコロナ春の塵

コロナ日々心しつや春の塵

植木 道子

☆現在、古谷たき子さんが母の家に住み込んで、姉妹たちと共に生活してくださっています。(月曜日〜金曜日)

イースター献金・賛助金

ありがとうございます

真学院

2月12日～6月30日分（敬称略）

青山学院初等部 浅川英彦 浅野康子

安東優 飯塚光喜 池田直子 池田憲昭

石垣鈴子 石塚久江・八重 今井佳代

上田貞 大谷祐一 大浜亜紀 鹿島信義

学校法人金城学院 菊地一男 小口晃生

久保木知子 後藤信子 斉藤恵美子 酒

井忍 柴山操 姉妹会 清水正雄 菅原

哲男 田浦教会エレミヤ会 高橋路子

東洋英和女学院中高部宗教委員会 長澤

洋子 中平安子 中村恵子 教団大泉教

会 教団柿ノ木坂教会 教団京都丸太町

教会 教団千歳船橋教会山畑謙 教団田

園調布教会 教団新居浜西部教会教会学

校 教団広尾教会米山恭平 松原教会婦

人部お仕事会 教団翠ヶ丘教会 教団む

さし小山教会 教団鎌倉雪の下教会 教

団代々木上原教会 長谷川寿美子 畑和

雄 花田こずえ 平川寛子 平山嘉繁

古田土直寿 松下明子 宮山成子 村田

充子 村松一恵 森史子 大和キリスト

教会支援委員会丹羽佳也子 横田哲子
横浜協立学園吉村知子 脇坂ゆかり 搜

★ 理事会（決議の省略による議決）

第228回理事会 3月28日

【報告】（文書報告）

第1号 かにた婦人の村建替えの件

第2号 業務執行理事の業務報告

【審議】

第1号 令和2（2020）年度事業計

画並びに予算案——理事・監事全員の

同意・確認により原案通り議決された。

★ 今年のベテスタの日は中止します

新型コロナウイルス感染症対策のため大変残念

ですが、中止させていただきました。

今年の担当施設いずみ寮のスタッフが、

皆さまに近況をお尋ねし、併せて各施設

の状況もお知らせしたいと思っています。

ベテスタ奉仕女母の家関係者の皆さま

の思いを共有する企画を考えております

ので、どうぞよろしく願っています。

★ 編集後記

主の大きな御名を讃美いたします。

皆さまからお寄せいただきましたご支

援に心から感謝申し上げます。特に台風

被害の大きかったかにた婦人の村とかに

た作業所エマオへのご支援は、大きなお

力を頂くことができました。しかし、か

にた婦人の村の施設は老朽化が著しく建

て替えが急務です。一刻も早く補助金申

請窓口が決まり、建て替え事業が開始で

きますよう願っております。

新型コロナウイルス感染症の終息はまだまだの

ようです、皆様の安全とご健康が守られ

ますよう心よりお祈り申し上げます。

2020年7月15日発行（年3回）

発行人 大沼昭彦

編集人 村田英彦

印刷所 (株)印刷センター

発行所

〒178-0006

東京都練馬区大泉学園町7-17-30

社会福祉法人ベテスタ奉仕女母の家

電話 03-3924-2238

https://www.bethesda-dmh.org/
振替口座 001900-2-1338164